恋綴り

I・B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋綴り

【Ｎコード】
Ｎ３８４３Ｍ

【作者名】
Ｉ・Ｂ

【あらすじ】
春から始まる恋のお話。想いと思いを繋いでいく、一枚の手紙。

――春眠、暁を覚えず。

四月序盤は、風がやや冷たく日差しが暖かい。
そんな空気の中で眠たくなる授業を聞くのは、二年生になったばかり、十七歳程度の少女達にとって、苦痛というよも、苦行でしかなかった。

窓際の一番後ろともなると、その感覚も大きくなる。
春の太陽と風は、その席に着く少女を眠りへと誘う。
生徒に厳しいと評判の中年数学教師の印象を悪くしたら、一年間のテストが辛くなる。
だからその少女は、襲いかかる睡魔をはね除けようと、脳内でタップダンスを踊る羊に狼をけしかけていた。

だが、そんな横道にそれた妄想が悪かったのか、少女の意識はだんだんと身体から剥離しようとしていた。このままでは、数学に赤い印しがつけられてしまう。そんな、取り留めもない極端な思考が、少女の頭を緩やかに埋め尽くしていく。

少女は、負けるものかと気合いを入れると、シャープペンシルをノックして、書き出せる体勢に移行する。目標は、自分の机。眠気覚ましの落書きタイムだ。

蝶を追いかける熊を、木陰から狩人が狙っている。
その狩人を木の上から狙う猿と、猿の頭上でほくそ笑む炊飯器の化け物。

ここまで書いて、少女は自分の脳を疑った、普段何を考えて生きているのか解らない、不思議な絵だった。

やがて少女は、机の上に自分以外の文字があることに気がついた。ころころとした可愛い字。その主は、女性だろう。

何故自分の机にこんな落書きがあるのか。そんなこと、少し考えればすぐに解る。

この学校は、夜間にも開いている。その夜間の部の生徒が少女と同じ席で、この落書きを書いたのだろう。

机の端に綴られた“眠い”の二文字が、小さな共感を少女の胸に抱かせた。

少女はふとあることを思いついた。

そして、思いついたからには即実行に移る。

なにせ、眠気覚ましも兼ねているのだから。

ノートの最後を、音を立てないように切り取ると、それにシャープペンシルで文字を綴っていく。手紙の出だしは、すぐに思い浮かんだ。

『初めまして。私も眠いです』

眠気を表現する、猫のイラストを書き添える。

それだけで、質素な手紙がぐっと可愛らしくなった。

『眠気覚ましに、文通しませんか？』

その一言を綴ると、そこからはもう自由だ。

好きな言葉を書き綴り、好きな歌詞を書き殴る。
授業の終了までそうすると、眠いと書かれた文字の下に、矢印を書いた。
そして、矢印に気がつくように願いながら、手紙をそっと机に入れた。
思わぬ暇つぶしが出来たことに、少女――水島香澄は、小さく微笑んだ。

†

香澄は、一言で言い表すのなら、すこし真面目な“普通”の生徒だ。
この年の女子高生にしては珍しく、染めていない黒い髪と、着崩さずに身を包む制服。
スカートの丈も長くもなく短くもない。彼女の友人達に比べれば、

長いくらいだろう。

校則に違反しない程度のナチュラルメイクは、彼女の雰囲気を落ち着かせる。
あまり派手なことが好きではない香澄は、こうしてひっそりのんびりとしているのが好きだった。

「かすみんっ！」

荷物を纏めて帰宅しようとしていた香澄に抱きつく、小さな影。
色素の薄い茶色の髪をショートにした、小柄な少女。

「千穂……」

彼女は安西千穂。香澄の幼なじみである。
くりくりとした大きい目と、一見校則違反と思われがちな、金に近い薄茶色の地毛。
千穂は、女子の平均身長よりも僅かに低い香澄の背よりも、さらに頭一つと少し低い背だ。

「ささ、一緒にかえろー」

ふにゃけた表情で、へらりと笑う千穂。
香澄の首に巻き付く彼女は、地元の道場に通う、柔道二段。
小柄な体型に見合わない、強い女の子だ。

「そうだね。さっさと帰ろう」

千穂に促されて、帰宅する。
桜の花が咲く校庭を抜けて、帰宅する生徒で賑わう正門へ歩く。

吹き抜ける春一番の心地よさに、香澄はそっと目を閉じた。

†

閑静な住宅街の一角。
駅からはやや遠く、車以外の交通の便が不便なため土地が安かった、という理由で香澄の父親が購入した、広い家。青い屋根に申し訳程度に設置された、ソーラーパネルが目印だ。

道の途中で千穂と別れて、香澄は一人帰宅した。
小さな門を潜ると、まず聞こえてくるのは、元気な柴犬の鳴き声だ。

『ワンワンッ』
「おかえり流星号」

犬の名前は、香澄の母親――香織――がつけたものだ。
流星号の親である彗星号からちなんで名付けたと言っていたが、彗星号も香織が幼い頃につけた名前だ。実に斬新なセンスである。

玄関を、鍵を使って開ける。
ローファーを脱いで、玄関に上がると、振り向いて靴を揃えた。

「ただいまー」
「――おかえり～」

やや間延びした、のんびりとした声。
どこかぽやぽやとしている、香織の声だ。

「あれ？雪人、まだ帰ってないんだ」
「ゆきくん、今日は部活だよー」

リビングに入ると、そう呟く。
すると、庭で洗濯をしていた香織が、ひょっこりと頭を出した。
黒のウェーブがかかった、長い髪だ。この癖毛は、香澄には受け継がれなかったようだ。
香澄は髪を伸ばさずセミロングで切りそろえているため、髪型も異なるが、顔立ちはよく似ていた。

香澄は、母親譲りの滑らかな黒髪が、自慢だった。

いつものならリビングでだらけている弟の姿が見えず、香澄はそう訊ねた。
そして、返ってきた答えに、今日は弟は、サッカー部の練習だったかと納得した。
雪人は、高校一年生。香澄と比べてワンランク下の男子校に通って

いる。
時折弟に勉強を教えるのは、家族の中でも彼女の役割だ。
冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出すと、それを持って二階に上がる。
自分の部屋に入ると、予習復習を済ませてから、雑誌を広げてベッドに転がった。
「手紙、見つけてくれるかな」
そう零した香澄の顔は、期待の笑顔に花開いていた。
彼女の日常に、一つの変化が、生まれようとしていた。

†

翌日、眠気と戦わなければならない数学の授業で、香澄は机の中を探った。
事前に調べておくのは、味気なかったので、今調べるのだ。

机の中に伸ばした手。
その手に当たる、小さな紙の感触。
ゆっくりと引き抜くと、自分の書いた紙ではない、感触。

手紙を開くと、そこには似た様な出だしがあった。

『初めまして。はい、私も眠いです。すごく』

そんな出だしに、香澄は頬を綻ばせた。
日常的なことや趣味、眠気覚ましになんでも書こうと綴った言葉が、全て返ってくる。
与え合う情報は、互いを特定できない簡素なもの。向こうもこちらも女性同士のお話だ。

シャープペンシルを手に、ノートに綴る。
最後に書かれたイニシャルは“ｍ・ｋ”だった。
香澄はそのイニシャルに目を丸くすると、自分のイニシャルも最後に書き綴る。

『それでは、“また”――――ｋ・ｍ』

この日から、顔も知らない女性と香澄の、小さな文通が始まった。

†

ある日は、香澄は道路で犬の散歩中に見つけたお地蔵さんの話を書いた。
すると彼女は、散歩帰りに見た、一際大きな木の話を綴った。

ある日、香澄は散歩コースですれ違う、顔のよく似た犬と飼い主の話を書いた。
すると彼女は、馴染みのカフェにいる、顔のよく似た姉妹の店員の話を綴った。

ある日、香澄は道で見つけた綺麗な白い花を、押し花にして手紙に挟んだ。
すると彼女は、自分のお気に入りの場所でみつけた桃色の花の話を綴った。

ある日、香澄はゴールデンウィークに京都へ行く話を自慢した。
すると彼女は、ゴールデンウィークに婚約者と旅行へ行く自慢をした。負けた。

ある日、香澄は散歩中にお気に入りのピアスを落とした話を書いた。
すると彼女は、お気に入りの場所でお気に入りの指輪をなくした話を綴った。

二人は、授業そっちのけで、手紙を交換した。
そうしている内に、いつの間にか、眠気覚ましが目的ではなくて、手紙のやりとりそのものが目的となっていた。

†

ゴールデンウィークが開けても、香澄は手紙を書いた。
だが、翌日帰ってきた手紙に、妙な胸騒ぎを覚えた。

その胸騒ぎの理由は、わからない。
だが、香澄の勘は、割と良く当たるのだ。

家に帰っても胸騒ぎが収まらなかった香澄は、踵を返して学校へ向かった。
走ってはいるが、そう早く学校へは戻れない、交通の便が不便だから、徒歩で通っている程、面倒な道のりなのだ。

夕暮れの校舎に入る。
駆け足で階段を上って、そこからは、慎重に。

ゆっくりと歩いて、教室を覗き込む。
そこには――自分の机に“手紙”を入れる、茶髪の男性の姿。

同じクラスの少年――――“香川、満”。
そのイニシャルに思い至り、香澄は思わず教室に飛び込んだ。

「水島……」
「なに、してるの」

満は、手元の手紙に気がついて、鳶色の目を泳がせた。
その仕草が“認めて”いるようで、香澄はその場にいることが耐えきれなくなり、背を向けて走った。

「み、水島！」

悔しかった。
女性のフリをしていた手紙に、気がつかなかったことが。

悔しかった。
まんまと騙されていたことが。

悔しかった。
――――顔は合わせなくても、“友達”だと、思っていたのに。
屋上に上がって、柵まで走る。
夕暮れを見ながら、香澄は涙をにじませた。
「水島！」
追ってきた満に、振り返る。
満は、涙に濡れた香澄の顔を見て、辛そうに目を逸らした。
「笑いに来たなら、笑えばいいでしょ？今までだって、笑ってきたんじゃないの？」
淡々とした声は、必死に激情を押し殺そうとしている証だった。
満は、その言葉に申し訳なさそうに――――首を、振った。
「違う」
「なにが」
「違うんだっ！」
自分よりも先に声を張り上げられて、香澄は肩を震わせた。
何故自分が怒鳴られているのか解らず、理不尽に対する怒りよりも、困惑が強くなる。
「ついてきてくれ」
「え――？」
踵を返して歩く満。
ますます意味がわからない。

だけど――――。

「ちょっ、ちょっと！待ってよ！」

――――ここでついていかなければ、後悔するような気がして。

香澄は、俯いて歩く満を追いかけた。

†

歩いている最中も、タクシーに乗り込んでからも、満はずっと無言だった。

その一種異様な空気に気圧されて、香澄は泣いていたことも忘れてついていった。

そして、辿り着いたのは――都心部の、総合病院だった。

ためらいもなく進んでいく満の背を、追いかける。
そして、ごく自然な歩みで、個室に入った。

「ちょっと――――え？」

その場所で香澄が見たのは、機械に繋がれて眠る、包帯姿の女性だった。
ベッドに横たわる姿は、見ていて痛々しい。

そして、その枕元。
そこに置いてある“手紙”に、香澄は目を見開いた。

それは、自分がやりとりしてきた、手紙。

「“真宮、佳奈”――俺の、従姉だ」
「まみや、かな」

その、イニシャルは――。

「ゴールデンウィークに、出かける前……交通事故で、意識不明になった」

ふらふらとおぼつかない足取りで、ベッドの上の佳奈に近づいた。
閉じられた目は、穏やかだ。

「意識を失う直前に、手紙を“もっと、続けたかった”って言ったんだ」

だから満は、自分が代わりに続けようとした。

人の字を真似るのは、満が得意とするところだった。

「でも、それって、水島を“騙す”こと、だったんだよな」

満の顔は、悔しげだ。

香澄に怒られるまで、彼はそれに気がつくことが出来なかった。

――――大好きな従姉の顔に、泥を塗りたかった訳じゃないのに。

「だから、ごめん」

その声に含まれた、真摯な感情。

佳奈を見た時点で、香澄の心に怒りはなく、この言葉で、僅かな翳りも消え去った。

「私こそ、疑ってごめん……佳奈さんのこと、聞かせて貰っても良い？」

「水島……あぁ、あぁ……聞いてくれ。なんでも、聞いて欲しい」

病室の、椅子に座る。

佳奈にも佳奈のことを聞かせるというのはおかしな話だが、それで目が醒めて欲しいという願望も、あったのだ。

満は、香澄に色々なことを話した。

小さい頃の、佳奈との思い出。

案外抜けている佳奈の、失敗談。

音楽が好きで、良く聞いているというＣＤの話。

二十歳に結婚を約束していた男が、事故と同時に婚約を破棄してきた、話。

感心して、笑って、納得して、憤慨して。
聞き入る香澄に、満は佳奈の話を続けた。

「お気に入りの指輪をなくしたって、落ち込んでたな」

そう呟いた、満の言葉。
香澄はそれを聞いて、勢いよく立ち上がった。

「それ、探そうよ！」
「え？」
「探して、佳奈さんに届けよう！」

困惑する満の手を掴んで、香澄は正面から、椅子に座る満の目を覗き込んだ。
あっけにとられていたが、満はすぐに、笑って頷いた。

「敵わねぇな……そうだな、うん。探そう！」

そこに、先ほどまでのわだかまりはない。
ただ、決意の笑顔だけがあった――。

†

集合は、日曜日。
佳奈が良く歩いていたという場所に、二人は集まった。

「この辺りをぐるぐると歩くのが趣味だった、みたいなんだけど」
「うーん……まずは歩いてみよう！」

古ぼけた神社、苔の生えた小川。
小さいけれど活気のある商店街。
寂れた映画館と、小ぎれいな喫茶店。

とくに手がかりの無いまま、二人は喫茶店で休憩していた。

「うぅ、なにかキーワードでもあればいいんだけど」
「そんな都合良くは、いかないか」

机に突っ伏して、項垂れる。
諦めるのはまだ早いが、息抜きが欲しかったのだ。

ストレートティーを注文して、窓の外を眺めながら、見逃している
除法は無いかと考える。
満も、同じような気持ちで、額に指を当てていた。

「お待たせしました」
「あ、ありがとう、ございい……」

受け取ったまま、香澄はウェイトレスの女性の顔を見て、固まった。
満は、そんな香澄の様子を見て首をかしげていた。

「水島？どうし――」
「そうだっ！」

香澄はストレートティーをその場で一気飲みをすると、お金を置いた。
そして、満の手を引いて店を飛び出した。
喫茶店では、飲み物を持ってきたウェイトレスと“顔のよく似た”レジの女性が首をかしげていた。

「ど、どうしたんだよ！」
「手紙！」

香澄は、手提げ鞄から、佳奈に貰った手紙を取り出した。
そして、そこに書いてある内容を下に、走る。

「道を抜けて、花屋があって、公園があって――そう、一際大きな木！」

目を丸くする満をよそに、香澄は進んでいく。
大きな杉の木の下を走って、まっすぐと突き進む。
その足取りには、迷いもためらいも、なかった。

「桃色の、花」

薄い桃色の、小さな花。
名前も知らない花が咲いた、開けた場所。

手紙が導いた、友達の“お気に入りの場所”に、香澄は笑みを浮かべた。

「探そう」

「え？」

その風景がどんな場所か。

それだけ聞いていた満は、見事に探し当てた香澄に目を丸くしていた。

「ここで、佳奈さんは指輪をなくした……だから、一緒に探そう！」

今更ながらに、お気に入りの場所でなくしたという話を思い出した満は、苦笑を零した。

だが、その顔は、どこか嬉しそうだった。

「あぁ……うん。探そう」

桃色の、花畑。

満は優しい笑みを浮かべたまま、身体を屈めて探し出した。

†

空が茜色に染まる頃、香澄と満は満足げな顔で帰るところだった。
香澄の鞄の中には、探し出した指輪が入っている。

「佳奈さん、喜ぶかな」
「喜ぶよ、絶対」

満の顔は、優しげだ。
その暖かい表情に、香澄は和やかに笑った。
彼が笑っているところを見るのが、なんとなく、気に入っていた。

「うん、そうだよねっ」

そう言って、笑う。
満も、香澄がこうして笑うのを見るのが、やはりなんとなく、気に入っていたのだ。

駅へ向かおうという道。
小さな商店街にさしかかったとき、香澄は後ろからぶつかってきた男に突き飛ばされた。
そこを、慌てて満が支える。

「あ――――――鞄」

香澄の手提げ鞄を持って、走る男。
あの中には、思い出の詰まった手紙と――――指輪。

「ちっ！」
「ひったくり！」

叫びながら、走る。
だが、スタートが遅れていたせいで、離されていく。

「誰か！捕まえてっ！」

香澄の声を聞きながら、ひったくりの男はマスクの下でほくそ笑む。
それほど大事なものなら値がつくはずだ。遊ぶ金が増えると、笑う。

男は、走る先に立ちふさがる、小柄な少女の姿を見つけた。
邪魔をする障害を突き飛ばそうと、走りながら手を伸ばす。

少女は、男の伸ばした右手を払うように、左手で逸らす。
そしてそのまま男の右手を掴むと、力の流れを利用して、男の懐に背を向けて潜り込んだ。

「へ？」
「でりゃあぁっっっ！！！！」

そして、走っていた勢いを全て利用して、投げ飛ばした。
見事な一本背負い投げだ。

「ふぎゅっ！？」
「――成敗」

蛙の潰れたような声をあげて、男は気を失った。
その男を見下すと、少女――千穂は、一言そう呟いた。

彼女の道場はこの近所。
道場の帰りだったのだ。

「で？どうしたの？かすみん」
「千穂……ありがとう」

万感の念を込めて千穂から鞄を受け取ると、香澄はその場にへたり込んだ。
そんな香澄を支える、満を見て、千穂は得心がいったように頷いた。

「警察への調書はわたしがやっておくからさ、二人は安心して続けて良いよ～」
「へ？千穂？」
「お、おい、安西……」

やってきた警察の下へ走っていく千穂。
香澄と満は千穂がどのような“勘違い”をしたのか思い至り、顔を見合わせて赤くなった。

†

夕暮れの、病室で、香澄は佳奈の枕元に座る。
その後ろでは、満が香澄の両親に事情を説明していた。
香澄は佳奈の手を握ると、その手に桃色の宝石がついた指輪を握らせる。

「私は、佳奈さんと、お話がしてみたいです」

佳奈に、ゆっくりと語りかける。
包帯で巻かれた佳奈の頭、僅かに見える、栗色の髪。

「たくさんお話しして、もっと佳奈さんのことが知りたいです」

指輪を握らせた、佳奈の左手。
その手を、香澄は優しく包み込む。

「一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に遊んで、佳奈さんと過ごしたい」

香澄は、目を閉じて、包んだ手を自分の頬に当てた。

「私の願い、叶えてくれませんか？私も、佳奈さんの願いを叶える、お手伝いがしたい」

そして、一筋の涙をこぼした。

「教えてくれませんか？佳奈さんの、願い」

こぼれた涙が頬を伝い、佳奈の手を伝って、指輪に落ちた。
指輪に涙が染み渡り――――そして。

「――――ん」

佳奈の瞳が、ゆっくりと、開いた。

「佳奈！」
「佳奈ちゃんっ」
「姉さん！」

佳奈の両親と、満が、佳奈に駆け寄る。
佳奈はまだはっきりとしない意識の中で、それでも薄く微笑んだ。

「わた…し…も……おはなし……したい…です…」

そうして、再び目を閉じる。
今度は意識を失った訳ではない。
体力を回復させたら目が醒める、緩やかな眠りだ。
香澄はその手を握ったまま、大粒の涙を流しながら、頷いた。

「はいっ！」

そしてそれでも、暖かな笑みで、笑って見せた。

†

朝焼けの空の下。
病院の屋上で風に当たる香澄の隣りに、満が並んだ。

「佳奈さんのそばに、いなくていいの」
「うん。おじさんもおばさんも、沢山話したいことがあるみたいだしね。――――婚約のことも、なんだか納得してるみたいだった」

こうなることがわかっていた。
そんな風に、寂しそうに微笑んだ、佳奈。
その顔を見て、自分では理解できない“なにか”があるのだと、満は感じた。

「でも、好きだったんじゃないの？佳奈さん」

その言葉に、満は苦笑した。
隣に佇む人の顔を覗くことが出来ないのは、香澄も同じ。
二人とも、顔を見れば、言葉を交すことが出来なくなってしまう。

「俺」
「うん」

短い言葉。
その言葉に込められた想いは、よくわかっていた。

「水島のことが、好きだ」
「うん」

香澄は頷くと、満の手に、自分の手を重ね合わせた。

「私も、好き」

手を握る。
すると、満も、暖かく握り返した。

朝日を全身に浴びながら、ゆっくりと目を合わせる。
満は赤い顔で微笑み、香澄は同じような顔色で、はにかんだ。

暖かい、光の中。
二人の影が、ほんの少しだけ重なった――――。

†

季節が巡り、春になる。
玄関で待ち合わせて楽しそうにデートへ向かう姉とその恋人の姿に、雪人はため息をついた。いつまで経っても、姉はバカップルだ。

そう言ったら姉は否定するが、否定できるのは当人達だけだ。
だいいち、惚気話を聞かされている雪人は、それを言う権利があった。

それを言うのなら、雪人だって。
そう言い返した姉に、雪人は言葉を詰まらせたことがある。

彼も散々、自分の姉に“恋人”の自慢話をしていたのだ。

甘い会話に花を咲かせる姉の姿を見て、雪人は年上の彼女に、無性に会いたくなった。

そして、それならば会いに行こうと、携帯電話を開く。

「あ、佳奈さん……雪人だけど、今から――――」

桜の季節から始まった、小さな手紙に書かれたことば。
繋がっていく感情は、今もなお紡がれ続けている。

彼ら、彼女らの胸に刻まれた、小さな小さなことば。
それはきっと、暖かくて、優しくて、甘い――――。

――――“恋”綴り。

（後書き）

手紙で繋がる、恋のお話です。
温めていたプロットを掘り出して、纏めてみました。

前作にファンタジー長編を書いたので、今回は毛色の違う恋愛短編を書きました。
次は中編かな……。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
また他の作品でも、お会いできれば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3843m/

恋綴り

2010年10月20日14時43分発行